

4. アメリカ議会図書館蔵、手描き旅順要塞砲台図および5千分の1地形図

—解説と目録—

藤森衣子（大阪大学文学研究科修士課程学生）

三崎 護（大阪大学文学部学生）

中村優希（大阪大学文学研究科博士前期課程学生）

鈴江文子（大阪大学文学研究科博士前期課程学生）

後藤敦史（大阪大学特任研究員）

小林 茂（大阪大学文学研究科）

筆者のうち小林は、2007年秋以来アメリカ議会図書館（The Library of Congress）地理・地図部（Geography and Map Division）で、外邦図の調査をつづけてきた。とくに同部所蔵の、日本陸軍の将校が中国大陸と朝鮮半島で1880年代におこなった簡易測量による手描き地図については、山近久美子（防衛大）、渡辺理絵（現山形大）らと継続的に調査をつづけ、すでに渡辺・山近・小林（2009）、小林・渡辺・山近（2010）、Yamachika, Watanabe and Kobayashi（2010）を発表してきた¹⁾。

この調査に際し、地理・地図部のスタッフより、上記の資料にくわえ、大量の旅順要塞の砲台に関する手描き図（資料番号：G7824.L89S5.SVAr.y6）を紹介された。これらの図は、後述するように、日露戦争時に編成された第二次臨時測図部の測量要員によって作成されており、あきらかに戦史用のものであった。旅順包囲戦に際して日本軍を悩ませた堡壘や砲台の構造を記録するために、旅順要塞陥落後に測量がおこなわれたわけである。

こうした砲台図も広い意味での外邦図に属し、その目録作成や写真撮影がひとつの課題になっていた。多くの場合、平面図の縮尺500分の1、断面図の縮尺100分の1という大縮尺図で、個々の図には作成した測量要員の氏名も記されており、日露戦争に関連する資料としても注目された。しかし、上記陸軍将校らによる地図の調査に忙しく、ほとんど調査する時間をもつことができなかった。

ただし小林は、2010年9月に、大阪大学文学研究科の大学院生ならびに学部学生全6名とアメリカ議会図書館を訪問する機会をえた。これは、同研究

科が申請した日本学術振興会の「若手研究者海外派遣事業」のうち「組織的な若手研究者海外派遣プログラム」によるもので、「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」と題する計画の一環として企画された。この「組織的な若手研究者海外派遣プログラム」は、博士の学位取得者、あるいはそれに準ずる若手研究者の海外派遣を主目的とするが、大阪大学文学研究科の「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」では、別に「横断的研究視察」として、世界の主要図書館にさまざまな分野の大学院生を短期間送り込み、資料や書籍の探索や閲覧、複写を体験させることとしていた。2010年の夏には、これに向けてアメリカ議会図書館と大英図書館に、それぞれ学生が派遣されることになり、上記のような資料調査の経験をもつ小林が、アメリカ議会図書館に派遣される学生の指導を担当することとなったわけである。

この派遣には、海外の図書館での資料調査の体験をもたない大学院生および学部学生が参加することになっていた。小林は、こうした学生に対し、上記旅順要塞砲台図を素材として、実習をかねた調査をおこない、下記のような作業を体験させることを計画した。まず資料一点一点について、タイトルや縮尺、作製者、サイズ、さらには簡単なスケッチ図をカードに記す作業がある。これによって砲台図の目録作成の基礎資料を準備することになる。もうひとつは、砲台図の写真撮影作業で、機材の設営から撮影画像の確認までをふくむことにした。くわえて、これらをもとに帰国後に報告書を作製し、資料調査の基本的プロセスの理解と技術を体得させることを

目的とした。本報告は、この実習の成果であり、同時に研究の報告でもあることを、あらためてことわっておきたい²⁾。

写真撮影にあたっては、やや特殊な三脚（マンフロット製）およびキャノン5Dカメラを持参した。またカメラとパソコンをつなぎ、撮影とともに画像がパソコンのモニターにうつるようにして、これを確認しながら作業を進めた。この作業にあたっては、日本史分野の研究に従事し、資料の撮影に習熟している後藤がリーダーをつとめた。

なお、この実習をおこなう際、地理・地図部のスタッフより、「五千分一旅順要塞近傍圖」も紹介された。これは印刷図で、旅順要塞およびその周辺をカバーし、しかも小林がそれまで接したことのない図であり、あわせて調査をおこない、全容を把握することとした。この「五千分一旅順要塞近傍圖」も、旅順要塞砲台図と同様に戦史用の図であり、その概要もあわせて報告することにしたい。この図の調査は小林がおもに担当したが、本報告に掲載する一覧図および一覧表の作成は、藤森がおこなった。また、この一部についておこなった写真撮影は、上記砲台図の撮影作業にあわせて実施したことを付記しておきたい。

もうひとつ言及しておかねばならないのは、この実習に宛てられたのは、9月8日の午後ならびに9月10日の午後にすぎず、時間が限られていたので、目録作成用のカード記入を優先したことである。このため、旅順要塞砲台図、「五千分一旅順要塞近傍圖」とも、写真撮影ができたのはごく一部にすぎない。また旅順要塞砲台図のうち「砲臺E圖」については、2008年9月に作成・撮影された渡辺理絵・山近久美子による資料カードと写真を使用している。

1. 旅順要塞砲台群の築造

旅順要塞砲台図について検討するに際して、まず旅順要塞の砲台群の築造および旅順要塞包囲戦について簡単に見ておくこととしたい。

旅順要塞砲台図にふくまれる図には、旅順のまわりの丘陵に設置された砲台のほか、北方の金州地峡の丘陵に設置された砲台を描くものもある。金州地峡は、旅順・大連の北方に位置する、遼東半島が

東西約3.3キロと狭くなっている部分で、半島先端部を効果的に防衛できる位置にある。この金州地峡の丘陵は、日本側が「南山」と呼んでいるものであり、以下これに設置された砲台を「南山砲台群」と呼ぶ。これに対し、旅順のまわりの丘陵に設置された砲台は「旅順砲台群」とする。

南山砲台群と旅順砲台群は、基本的に日本軍による旅順攻撃のまえにロシア軍が構築したものと考えてさしつかえないが、旅順砲台群については、すでに1880年から清国によって防衛施設の築造が開始されていた（《中国軍事史》編写組1991:400-404）。日清戦争にあたっては、これが補強され、『明治三十七八年日清戦史』附図第十五「旅順港戦闘圖」（2万分の1）（参謀本部編1904-1907）にみられるように、旅順口（日露戦争時には旧市街となる）を半円形にとりかこむように東側から北側、西側にかけて高所に砲台が配置されるほか、旅順港の入り口付近には、海にむけた砲台も構築されていた（図1）。平面形からみてもこれらは近代的な要塞であり、ドイツの指導によったようである（Powell 1955:48）。

日清戦争後の三国干渉をへて、ロシアは遼東半島に対する権益を拡大し、1898年には旅順・大連の租借権を獲得する。これ以後ロシアによる旅順要塞構築が計画されたが、初期の案は大規模すぎて費用も大きく採用されなかった。1900年になって提案されたより小規模な案が採用され、1909年の完成に向けて工事が実施されたが、その進行は緩慢であったという。しかし、日露戦争が近づいてからは急速に整備され、それについては、とくにコンドラチェンコ少将の役割が大きかったとされている（ロストノフ編1980:82-84,190-192）。『明治三十七八年日露戦史』第六卷附図第一「旅順要塞攻撃作業一覧圖」（16,800分の1）（参謀本部編1914）にみえる要塞は、これによるものとなる（図2）。日清戦争時の旅順を示す、上記の「旅順港戦闘圖」と比較してみると、日清戦争までに築造された堡壘や砲台を充実させつつ中核としながらも、さらに周辺部と内部にむけて防衛施設を拡充しつつ整備されたことがわかる。

主要防衛線は、半永久堡壘（第1～第5）、堡壘（3～5号）、独立砲台（「ア」～「デ」）を中核としていた。これらの間の部分は、塹壕や鉄条網などで掩護され



図1：日清戦争時の旅順要塞

資料：『明治二十七八年日清戦史』（参謀本部編 1904-1907）附図第十五「旅順港戦闘圖」（2万分の1）を82%に縮小



図2：日露戦争時の旅順要塞

資料：『明治三十七八年日露戦史』（参謀本部編 1914）第六卷附図第一「旅順要塞攻撃作業一覽圖」（16,800分の1）を66%に縮小

るほか、重要な場所には、地雷も埋設されていた。主要防衛線の前方の高地に構築された前衛陣地では、塹壕が掘られ、野戦用多面堡も構築されていた。さらに主要防衛線の背後には、中間砲台が構築され、探照灯も整備されていた。

他方、南山砲台群の整備は旅順砲台群よりは遅く開始されたようである。日清戦争時に付近の金州で戦闘がおこなわれたが、清国側に金州地峡を防衛線とする考えはなかったとみられる。『ロシアはなぜ敗れたか』の記述からすると（コナフトン 1989: 111）、ロシアは義和団事件（1900年）に際し防衛施設の築造に着手し、1903年にはこれを拡大する計画が立案されたが、実現にいたらず、日露戦争が開始されるにおよんで、急速に整備されたようである。南山に構築した陣地は、砲台、多面堡、眼鏡堡のほか、二段、場所により三段に掘られた塹壕から構成されていた。さらに鉄条網や地雷が設置され、掩蓋や坑道が構築されるほか、電話線が引かれ、探照灯も設備されていた（図3）。

ところで、砲台図に描かれた軍事施設は、ロシア側の構築したものであり、それぞれにすでに一部示したような名称をもっていた。他方、日本軍は攻撃にあたり、漢字で表記された現地名をもとに、これらに名称を付与することになった。この状況については、翻訳書『ソ連から見た日露戦争』（ロストノフ編 1980）を監修した歴史学者の大江志乃夫がつぎのように述べている。

本書を訳する上での最大の困難は地名にあった。頻出する地名の多くは、中国語地名の中国語発音をロシア文字に移したものであるがその発音はかならずしも正確に移されていない。他方、日本側戦史の記述および付図の地名は中国語の発音によらず漢字記載である。両者を綿密に対照しながら地名を確定していく作業は思いのほかに難作業であった。さらに、とくに旅順要塞に多いのであるが、中国の本来の地名とは関係なく、日露両軍がそれぞれ勝手に名称を付しているものも多い。これを日本側の戦史と対照しながら名称を確定する仕事も大変な仕事であった。（中略）参考のために、第四章の旅順攻囲戦にかぎって、日露両軍が便宜的に呼

称した地名や堡壘名の対照一覧表を付しておいた（大江 1980）。

この大江の記述から、旅順要塞の攻防戦について、ロシア側資料の記載と日本側資料の記載を、綿密につき合わせて検討する作業が、充分におこなわれていなかったことがうかがわれる。また、大江以後にこの種の作業がおこなわれたかどうか、検討してみたが、関連する文献を発見することができなかった。したがって、以下では『ソ連から見た日露戦争』（ロストノフ編 1980: 261-263）に掲載された「地名対照表」も資料のひとつとして記載をすすみたい。なお、短いものではあるが、類似の地名対照表は、小説『旅順港』（ステパーノフ 1972）の冒頭にも付されている。これは訳者の袋一平と袋正によるものである。

これに関連してもう一点指摘しておきたいのは、砲台など軍事施設に関するロシア側の名称と日本側の名称の示す範囲がかならずしも一対一のかたちで対応しているわけではない、という点である。たとえば南山砲台群について、『ソ連から見た日露戦争』は「一三個の砲台、五個の多面堡、三個の眼鏡堡」からなるものに対し（ロストノフ編 1980: 170）、『明治三十七八年日露戦史』第一巻附図第一二「南山附近第二軍の戦闘」の「露軍之防禦工事及備砲」（2万分の1）では、第一～第七、第九～第一六砲台のほか、第一、第二、第八、第九および中央角面堡、さらに第三～第五眼鏡堡を記している（参謀本部 1912）。眼鏡堡の数が一致するほか、ロシア側の多面堡が日本側の角面堡に対応することがあきらかであるが、砲台数は一致しない。これは施設のユニットの認定のレベルで、すでに両軍の間でくいちがいがおこっていることを示している。

さらに留意すべきは、類似のくいちがいが旅順要塞砲台図と『明治三十七八年日露戦史』でも見られる点である。その一例として、旅順要塞砲台図では「砲臺A圖」～「砲臺F圖」とアルファベットのついた砲台図があるが、『明治三十七八年日露戦史』第六巻附図第一「旅順要塞攻撃作業一覧圖」（参謀本部 1914）には、そうした名称の砲台はみあたらない。また、「N. 8 砲臺」～「N. 12 砲臺」が旅順要塞砲台図にみられるが、これも上記「旅順要塞攻撃作業一覧圖」にはみられない。この点から、現場での

砲備及工事禦防之軍露

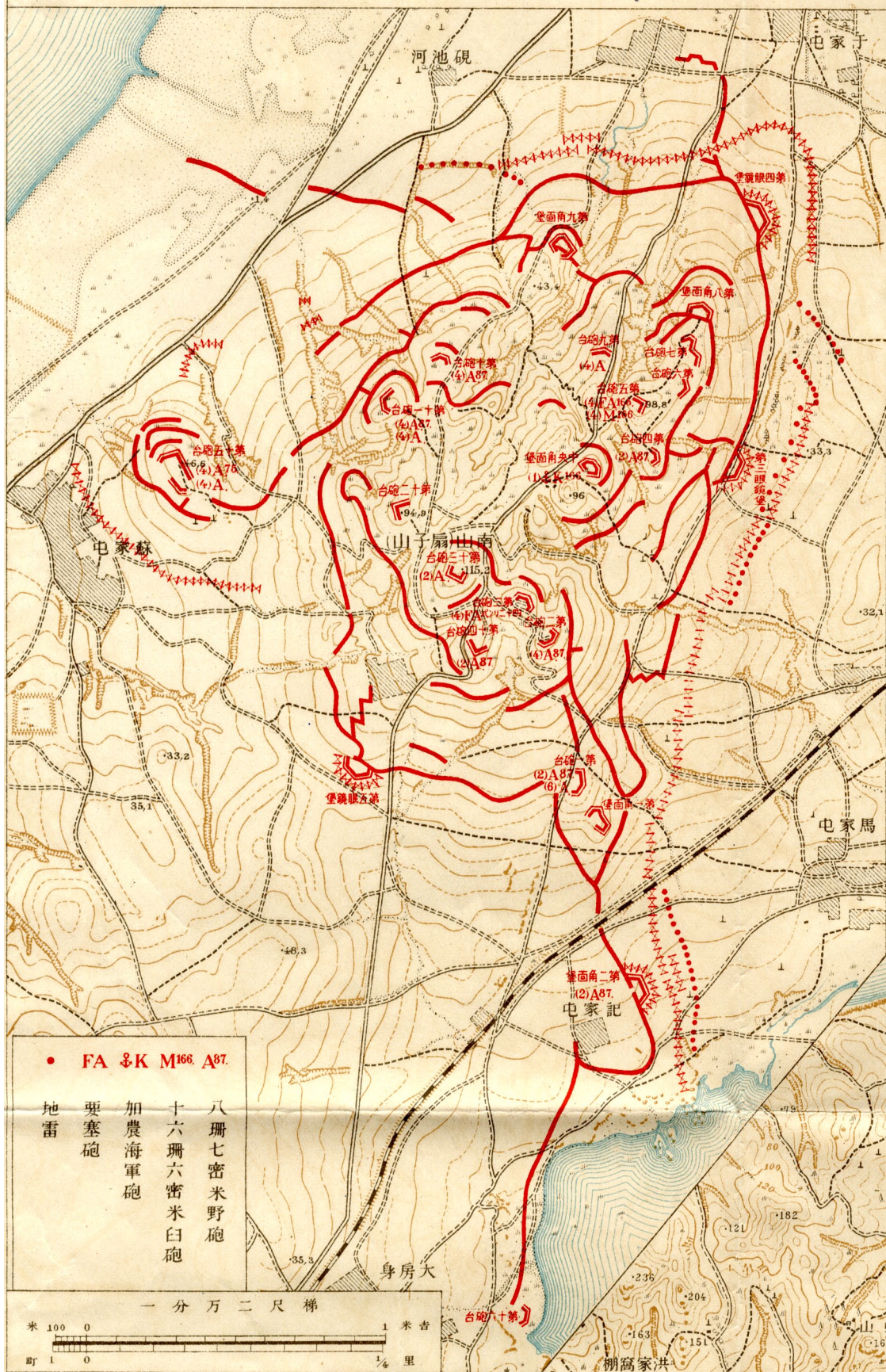


図3：日露戦争時の南山の堡壘と砲台

資料：『明治三十七八年日露戦史』（参謀本部編 1912）第一卷附図第十二「南山附近第二軍之戦闘」の「露軍之防禦工事及備砲」（2万分の1）



図4：東鷄冠山北堡壘付近（1）

資料：「五千分一旅順要塞近傍圖」第20号「二龍山」図幅の右下部分を80%に縮小

郎も参加した、日露戦争における測量作業を回想した座談会「明治三十七八年戦役と測量」（野坂ほか1944）をおさめる『研究蒐録地図』昭和19年3月号に口絵写真として掲載されている（図6）。この2枚の図は「露將コンドラチェンコ爆死の跡 明治三十七八年戦争従軍寫景班筆」というタイトルで、東

鷄冠山北堡壘を描いたものである⁵⁾。和田が「…旅順が陥落して市街の指定された宿舎に入りましてから敵の要塞、堡壘等を全部スケッチしました…」としているところからしても、他に多数のスケッチ図があったと考えられ、今後探索する必要がある。



図6：「露將コンドラチェンコ爆死の跡」

資料：『研究蒐録地図』昭和19年3月号口絵写真

和田の回想でもうひとつ留意されるのは、旅順要塞と南山については、地形模型作成にむけて5千分の1で測量し、1メートル以上の地形の起伏と構築物は表記するよとの命令が別にあった点である。これでできたものがすでにふれてきた5千分の1地形図となるが、その場合、旅順をカバーする「五千分一旅順要塞近傍圖」のほかに、南山をカバーするものもあったことになる。これについては、まだ現物を確認していないが、作成されたことに疑いの余地はない⁶⁾。

これら5千分の1地形図に関連して興味ぶかいのは、旅順攻撃にあたった第三軍（司令官は乃木希典）の参謀長であった伊地知幸介の長岡外史参謀次長に対する意見具申である（1904年9月6日付⁷⁾。金州半島（遼東半島先端部をさすと考えられる）の5万分の1図は粗略なので、2万分の1もしくは1万分の1地形図を作製するとともに、「戦場模型」調製のためには、その部分だけ5千分の1の縮尺で測量する必要があるとしている。

ともあれ、5千分の1地形図作製のための測量は、旅順近傍に関しては、旅順陥落（1905年1月）以後の作業になったと考えられる。また砲台図の作製のための測量も、この時期になった可能性が高い。さらにこの作業は、日露戦争に際して編成された臨時測図部（第二次）のうち、第一地形測図班であったことが確実である。なお、旅順陥落後に旅順要塞司令官に就任した伊地知幸介は、この測図班に工兵士官1名を配属するよう参謀次長に依頼しており⁸⁾、戦史資料用の測量作業に関心をもっていたことがうかがえる。

他方、南山地区の砲台図については、後掲の表1に示すように、測量時期を示すと考えられる書き込みがあり、いずれも「明治三十七年十一月」となっている。日本軍の攻撃を受けて南山からロシア軍が撤退したのは1904年5月下旬であり（山田2009:108-110）、その後の旅順包囲戦の最中におこなわれたことになる。また5千分の1地形図の測量についても、複数の参加者の履歴書から1904年の10月初旬から12月初旬までにおこなわれたことが確認できる⁹⁾。

和田の回想にもどると、日露戦争に関連した地形

模型は南山と旅順要塞にくわえて、安奉線に関するものが作製されたという。このうち南山と旅順要塞の模型は、縮尺5千分の1の純銅製で、表面は上質の油絵の具で着色してあった。サイズは南山模型で7尺（2.1メートル）四方、旅順要塞模型で縦3間半（6.3メートル）、横3間（5.4メートル）と巨大なものであった。他方安奉線は、安東（現丹東）から奉天（現瀋陽）にむかって軍事用に敷設された軽便鉄道（岸田2010）で、この一部を紙型の模型とした。福金岑（縮尺3,000の1）、鶏冠山（同1,500分の1）、黒坑岑（同2,000の1）と3つの部分にわかれていた。このうち南山模型、旅順要塞模型とともに、皇居建安府に奉納されたのは黒坑岑模型であった。ただしこれらの模型はあまりに大きく、建安府の建物にはいらないので、その脇に模型館をつくり納めたという。

本報告を準備するにあたり、上記の模型が現存するかどうか関心をもち、宮内庁に電話で問い合わせたところ、不明とのことであった。今後は、これらが現存するかどうかをふくめ、さらに調査したい。

以上、戦史資料の収集過程について検討した。つぎにアメリカ議会図書館で調査した旅順要塞砲台図と「五千分一旅順要塞近傍圖」を紹介しつつその作製過程を検討したい。

3. 旅順要塞砲台図と「五千分一旅順要塞近傍圖」の目録と測量担当者

まず、旅順要塞砲台図の目録から述べたい。旅順要塞砲台図の各葉には、そのタイトルとともに作製者が示されている。「東鶏冠山北堡壘圖」を例に、それを示したのが図7と図8である（本誌表紙の写真参照）。タイトルの脇には縮尺（平面図500分の1、断面図100分の1）のほか付図の枚数を示し、作製者については左下に「臨時測圖部第一地形測圖班第一分班測圖手 横山正三」と、その所属と職名もしめしている。旅順要塞砲台図の目録（表1）の主要部分はこうした記載を用いて作成したものである。また上記『ソ連から見た日露戦争』の「地名対照表」にみえるロシア側の名称についても、あわせて記入している。さらに備考では、『明治三十七八年日露戦史』の「旅順要塞攻撃作業一覽圖」にみられる名称との関係などについてもふれることとした。

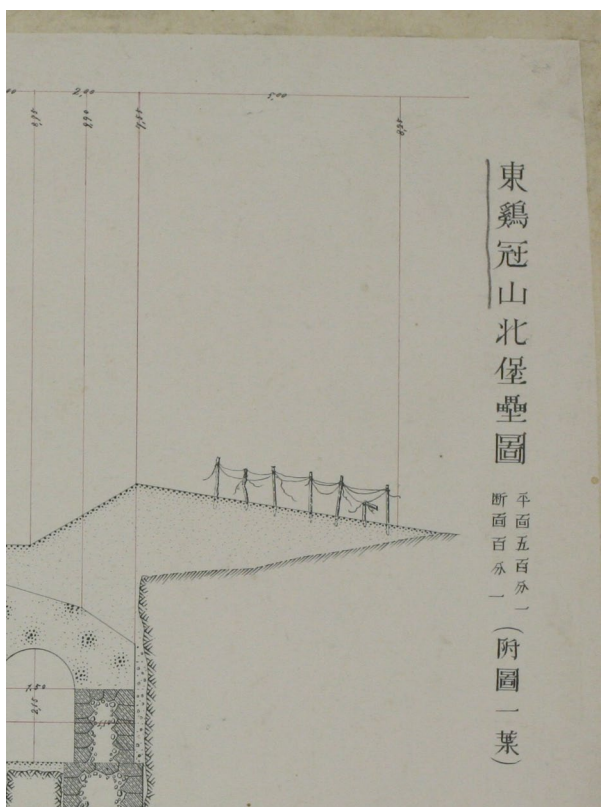


図7：旅順要塞砲台図「東鷄冠山北堡壘圖」右上部分 (80%に縮小)

なお、作製者の所属にあられる「臨時測図部」は、すでに少しふれたように、日清戦争以後に、海外での戦争状態を利用した測量にむけて、たびたび編成された臨時機関である。陸地測量部の幹部と技術者を中心に、臨時に雇用されたものもあわせて構成されていた。日露戦争時発足当初 (1904年5月) には経緯度測図班 (30名) にくわえて地形測図班 (64名) が2班、さらに本部 (19名) と小規模であったが¹⁰⁾、8月になって地形測図班を3班増やすだけでなく、各地形測図班の人員も増やして朝鮮半島や中国大陆、さらには樺太で測量をおこなった¹¹⁾。

こうした臨時測図部のうち第一地形測図班は、旅順要塞の陥落 (1905年1月) 以後、2月末には旅順口付近で活動していたことが他の資料からも確認できる¹²⁾。この後、8月になると第一地形測図班の一部 (一個分班) は、樺太に派遣されることになる。樺太は7月に日本軍が占領したばかりで、派遣された測量要員はその測量作業に従事したが、ロシアとの講和 (9月) 以後は、北緯50度の国境確定作業にも関与することになる¹³⁾。

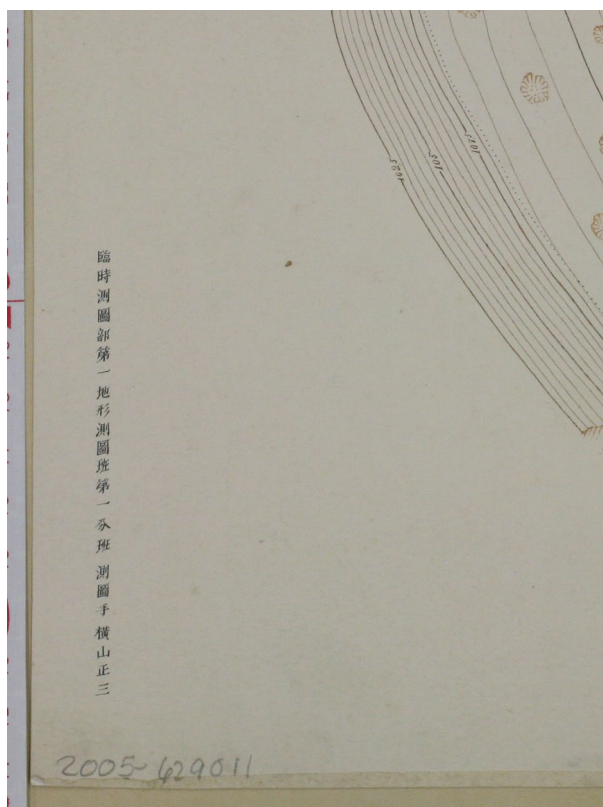


図8：旅順要塞砲台図「東鷄冠山北堡壘圖」左下部分 (80%に縮小)

表1では、あわせて地図作製者の氏名を示している。地図製作者には「測量手」と「測図手」があり、前者は、陸地測量部の正式技術職員で、判任官と呼ばれるランクであった。これに対し、後者は臨時雇いの雇員となる。表1の原重治、松井哲次郎、向井徳一、柳谷正因は測量手で、うち向井は陸地測量部修技所の第1期生徒として1890 (明治23) 年に卒業している。また柳谷は第5期生徒で、卒業は1897 (明治30) 年である (日本測量協会編1952)。これに対し原と松井は、陸地測量部発足以前の1881 (明治14) 年に参謀本部測量課に雇用され、1888 (明治21) 年には陸軍九等技手となっており¹⁴⁾、向井や柳谷よりは年長であったと考えられる。

他方、測図手の秋山利一郎、執行勤四郎、横山正三のうち、秋山と横山は、1907 (明治40) 年に陸地測量手に昇格しており、そのときに本人から提出された履歴書から経歴を詳しく知ることができる¹⁵⁾。秋山は1878年の生まれで、1902年に私立工手學校を卒業し1904年から陸軍省雇員となり、翌1905年3月11日～9月21日の間「旅順口砲台五百分一

表1：アメリカ議会図書館所蔵 旅順要塞 砲壘・砲臺関係資料目録

地図	タイトル	地名対照	サイズ (縦×横)	縮尺 (平面)	縮尺 (断面)	作製者	備考
1	南山堡壘一號		57.6×57.4	1/500		原重治	明治37年11月 金州
	南山堡壘三號		57.7×57.1	?		原重治	明治37年11月 金州
	南山堡壘五號 七號		57.8×57.0	?		向井徳一	明治37年11月 金州
	南山砲臺三號		57.4×57.3	?		向井徳一	明治37年11月 金州
	南山砲臺八號		58.0×57.6	?		原重治	明治37年11月 金州
	南山砲臺十號ノ一		57.8×57.4	?		向井徳一	明治37年11月 金州
	南山砲臺十號ノ二		57.2×57.4	?		向井徳一	明治37年11月 金州
	南山砲臺十號ノ三		57.2×57.5	?		向井徳一	明治37年11月 金州
2	城東山高砲臺		58.3×58.0	1/500	1/100	秋山利一郎	「城東山」は、一覽図範囲外 五千分の一図で確認(半島つけね)
	城東山低砲臺		57.4×58.7	1/500	1/100	向井徳一	附圖六葉
	城東山低砲臺百分一断面圖		27.7×31.6			向井徳一	附圖ノ一
	城東山低砲臺百分一断面及高面圖		27.7×31.6			向井徳一	附圖ノ二
	城東山低砲臺百分一断面圖		27.7×31.5			向井徳一	附圖ノ三
	城東山低砲臺百分一断面圖		27.7×31.5			向井徳一	附圖ノ四
	城東山低砲臺百分一断面圖		27.7×31.6			向井徳一	附圖ノ五
3	鶏冠山第一砲臺		56.4×58.4	1/500	1/100	向井徳一	「鶏冠山」は、五千分の一図では場所特定困難
	鶏冠山第二砲臺		57.6×56.9	1/500	1/100	向井徳一	
4	饅頭山砲臺		58.0×57.5	1/500	1/100	秋山利一郎	「饅頭山」は、一覽図では範囲外 附圖三葉(半島つけね)
	饅頭山砲臺圖附圖ノ一		27.7×31.6		1/100	秋山利一郎	
	饅頭山砲臺圖附圖ノ二		27.7×31.5		1/100	秋山利一郎	
	饅頭山砲臺圖附圖ノ三		27.7×31.6		1/100	秋山利一郎	
5	蠻子營砲臺		56.8×57.4	?		秋山利一郎	附圖三葉
	蠻子營砲臺圖附圖ノ一		27.8×31.5		1/100	秋山利一郎	方眼
	蠻子營砲臺圖附圖ノ二		27.6×31.5		1/100	秋山利一郎	方眼
	蠻子營砲臺圖附圖ノ三		27.7×31.4		1/100	秋山利一郎	
	蠻子營附属砲臺		57.3×57.6	?		秋山利一郎	
6	威遠砲臺		56.9×57.1	1/500	1/100	向井徳一	
7	黄金山高砲臺西附属第一砲臺圖		56.8×57.8	1/500	1/100	横山正三	
	黄金山低砲臺圖		57.7×57.0	1/500	1/100	横山正三	
	黄金山高砲臺圖		57.9×57.6	1/500	1/100	横山正三	
8	模珠礁堡壘圖		57.2×57.5	?		横山正三	
	模珠礁砲臺圖		56.0×57.6	?		松井哲次郎	
	模珠礁第一砲臺圖		57.0×56.0	?		松井哲次郎	
	模珠礁第二砲臺圖		56.0×57.0	?		松井哲次郎	
9	山頂威堡壘圖		56.1×57.6	1/500	1/100	松井哲次郎	
10	嶗嶺嘴高砲臺圖		57.8×57.6	1/500	1/100	横山正三	
	嶗嶺嘴低砲臺圖		58.2×58.0	1/500	1/100	横山正三	
11	南夾板嘴砲臺圖		57.8×57.0	?		横山正三	
	南夾板嘴堡壘圖		56.3×57.8	?		柳谷正因	
12	趙家溝南堡壘圖		58.6×56.8	1/500	1/100	執行勤四郎	一覽図では、「南」なし

地図	タイトル	地名対照	サイズ (縦×横)	縮尺 (平面)	縮尺 (断面)	作製者	備考
13	白銀山舊堡壘圖之一	クレストフ山 第一号砲壘	56.5×56.1	?		松井哲次郎	一覧図では、「舊」「新」 なし 規模の面から舊 砲壘を第一号砲壘とす る
	白銀山舊堡壘圖之二	クレストフ山 第一号砲壘	56.0×57.0	?		松井哲次郎	
	白銀山北堡壘圖	クレストフ山	57.9×57.5	1/500	1/100	柳谷正因	鉛筆で〇〇二十七日 着手三十日完 一覧 図では「北」なし
	白銀山新堡壘圖	クレストフ山	58.0×58.5	1/500	1/100	横山正三	五千分の一図では、 「新堡壘」なし
	白銀山四砲臺圖(仮称)	クレストフ山		1/500	1/100	柳谷正因	白銀山附属堡壘、白銀 山砲臺、白銀山附属第 二砲臺、白銀山附属第 一砲臺 鉛筆五月十七日着手 二十日完
14	教場溝南堡壘圖	ラベロフ山	56.5×57.0	1/500	1/100	柳谷正因	
15	老頭山砲臺圖	ペズイミヤンナ ヤ山	58.0×57.8	1/500	1/100	執行勤四郎	
16	大孤山堡壘		57.0×58.4	1/500	1/100	向井徳一	
17	吉永堡壘圖		57.8×57.8	1/500	1/100	横山正三	一覧図にはなし 五 千分の一図に記載
18	東鷄冠山堡壘圖		56.1×56.1	1/500	1/100	柳谷正因	一覧図では、「東鷄冠 山第一」「第二」の区別 あり
	東鷄冠山南堡壘圖		57.4×58.6	1/500	1/100	横山正三	
	東鷄冠山北堡壘圖	第二号砲壘	57.2×58.1	1/500	1/100	横山正三	写真済 附圖一葉(但 し不明)
19	一戸堡壘圖	第二号掩蓋	57.8×58.4	1/500	1/100	横山正三	
20	盤龍山東堡壘圖	第一号多面堡	57.5×57.7	1/500	1/100	柳谷正因	
	盤龍山西堡壘圖	第二号多面堡	58.2×58.3	1/500	1/100	柳谷正因	鉛筆で六月十日着手 十四日地上完成
21	二龍山堡壘圖	第三号砲壘	57.9×57.9	1/500	1/100	柳谷正因	附圖二葉 鉛筆十六日 着二十一日
22	龍眼北方堡壘圖、丸山堡壘圖、砲臺 F圖	ウオドロブロウオ 多面堡	58.1×57.9	1/500	1/100	柳谷正因	
23	松樹山堡壘圖	第3号堡壘	57.4×57.4	1/500	1/100	横山正三	附圖二葉
	松樹山堡壘圖附圖ノ一		27.8×31.5		1/100	横山正三	方眼
	松樹山堡壘圖附圖ノ二		27.8×31.5		1/100	横山正三	
	松樹山補備砲臺圖	クルガン砲台	57.8×57.6	1/500	1/100	横山正三	一覧図では、「第一砲 臺」～「第四砲臺」の区 別あり
24	王家屯堡壘圖		58.5×57.9	1/500	1/100	横山正三	
25	白玉山北堡壘圖		58.3×57.6	1/500	1/100	横山正三	附圖二葉 一覧図で は「北」なし
	白玉山北堡壘附圖ノ一		27.7×31.6		1/100	横山正三	方眼
	白玉山北堡壘附圖ノ二		27.8×31.6		1/100	横山正三	
26	水師營南方第一堡壘、水師營南堡 壘	クミルネン多面 堡	57.0×58.4	1/500	1/100	柳谷正因	一覧図では、「南方」 「南」なし
27	徐家屯西方堡壘圖		57.9×57.9	1/500	1/100	執行勤四郎	
28	孫家溝北第一堡壘圖		58.8×58.0	1/500	1/100	執行勤四郎	一覧図では、「北」なし
	孫家溝北第二堡壘圖		57.5×57.8	1/500	1/100	執行勤四郎	

地図	タイトル	地名対照	サイズ (縦×横)	縮尺 (平面)	縮尺 (断面)	作製者	備考
29	椅子山堡壘圖第一	第四号堡壘	57.9×57.9	1/500	1/100	柳谷正因	写真済
	椅子山堡壘圖第二	第四号堡壘	57.9×57.9	1/500	1/100	柳谷正因	写真済、このスケッチは大きく横長に描かれている
30	大案子山堡壘	ズビチャートヤ 第4号堡壘	57.5×57.8	1/500	1/100	向井徳一	附圖三葉 対照表による「案子山」は「大案子山」とした
	大案子山堡壘百分一断面圖 附圖ノ一	ズビチャートヤ 第4号堡壘	27.7×31.6			向井徳一	方眼
	大案子山堡壘百分一断面圖 附圖ノ二	ズビチャートヤ 第4号堡壘	27.7×31.6			向井徳一	
	大案子山堡壘百分一断面圖 附圖ノ三	ズビチャートヤ 第4号堡壘	27.5×31.2			向井徳一	方眼
31	海鼠山堡壘圖之一	ドリンナヤ山	57.8×57.9	1/500	1/100	秋山利一郎	
	海鼠山堡壘圖之二	ドリンナヤ山	58.4×58.1	1/500	1/100	秋山利一郎	
32	化頭溝山堡壘圖	師団高地	58.3×57.6	1/500	1/100	柳谷正因	一覧図では「化頭溝山」と記載され、堡壘は確認できず
33	大頂子山堡壘圖	ウグローバヤ山	58.6×57.8	1/500	1/100	執行勤四郎	一覧図では「大頂子山」と記載され、堡壘は確認できず
34	爾靈山堡壘		57.3×58.0	1/500		向井徳一	
35	北太陽溝西砲臺	ペレペリーナヤ	58.0×57.4	1/500	1/100	秋山利一郎	一覧図では、「砲壘」記載はあるが「砲臺」なし
36	西太陽溝第一堡壘	(第五号堡壘)	57.6×58.2	1/500	1/100	向井徳一	一覧図では、「第一堡壘」「第二砲壘」区別なし 対照表による「第五砲壘」位置確定困難
	西太陽溝第二堡壘	(第五号堡壘)	57.0×57.8	1/500	1/100	向井徳一	
	西太陽溝第一砲臺		58.0×58.0	1/500	1/100	向井徳一	鉛筆 向井 附圖二葉 (但し附圖ノ一は無し)
	西太陽溝第一砲臺附圖之二	「デ」号砲台	27.6×31.5			向井徳一	
	西太陽溝第二砲臺圖		57.9×58.0	1/500	1/100	秋山利一郎	
37	西山堡壘		58.2×58.4	1/500	1/100	向井徳一	一覧図では、「砲臺」記載され、「砲壘」記載なし
38	鴉鳴嘴堡壘圖	第5号堡壘	58.0×57.7	1/500	1/100	秋山利一郎	附圖四葉
	鴉鳴嘴堡壘圖附圖ノ一	第5号堡壘	27.7×31.3		1/100	秋山利一郎	方眼
	鴉鳴嘴堡壘圖附圖ノ二	第5号堡壘	27.7×31.6		1/100	秋山利一郎	方眼
	鴉鳴嘴堡壘圖附圖ノ三	第5号堡壘	27.8×31.6		1/100	秋山利一郎	
	鴉鳴嘴堡壘圖附圖ノ四	第5号堡壘	27.7×31.6		1/100	秋山利一郎	方眼
39	盛家溝北堡壘圖		57.8×57.8	1/500	1/100	秋山利一郎	
	盛家溝西堡壘圖		58.2×57.7	1/500	1/100	秋山利一郎	
40	潘家溝西堡壘		57.5×57.4	1/500	1/100	向井徳一	「潘家溝」は、一覧図では範囲外 五千分の一図で確認(「盛家溝」南接) 鉛筆で「向井」
	潘家溝南堡壘		57.2×57.6	1/500	1/100	向井徳一	

地図	タイトル	地名対照	サイズ (縦×横)	縮尺 (平面)	縮尺 (断面)	作製者	備考
41	白嵐子堡壘		57.7×57.8	1/500	1/100	秋山利一郎	「白嵐子」は、一覽図では範囲外 五千分の一図で確認(「西太陽溝」の南) 附圖一葉
	白嵐子堡壘圖附圖		27.7×31.7		1/100	秋山利一郎	
42	老鐵山北堡壘		56.9×56.6	1/500	1/100	向井徳一	「老鐵山」は、一覽図では範囲外 五千分の一図で確認(「西太陽溝」の南西)
	老鐵山南堡壘		不明×57.4	1/500	1/100	秋山利一郎	
43	陳家泉第一砲臺、陳家泉第二砲臺		57.1×57.3	1/500	1/100	向井徳一	「陳家泉」は、一覽図では範囲外 五千分の一図で確認(「盛家溝」の南西)
	陳家泉第三砲臺		57.4×57.4	?		秋山利一郎	
	陳家泉第四砲臺		57.6×58.1	1/500	1/100	秋山利一郎	
不明1	No.8砲臺	サペールナヤ	34.4×57.7	?			厚紙
不明2	No.9砲臺		57.2×58.0	1/500	1/200		厚紙
不明3	No.9砲臺		57.2×58.0	1/500	1/200		厚紙 概略図
不明4	No.10・11・12砲臺		86.6×68.0	1/500	1/200		写真済
不明5	赤坂山堡壘		57.7×57.9	1/500	1/100	秋山利一郎	
不明6	砲臺A		57.4×57.5	1/500	1/100	向井徳一	
不明7	砲臺B		57.4×57.5	1/500	1/100	向井徳一	
不明8	砲臺C		57.8×57.6	1/500	1/100	横山正三	
不明9	砲臺D		57.2×57.2	1/500	1/100	横山正三	
不明10	砲臺E圖		57.0×57.5	1/500	1/100	横山正三	

注 1) 図の配列は、冒頭に南山砲台群を示す。つぎに旅順湾の南の半島部にうつり、さらに反時計まわりに旅順市街の周囲を一巡する。

各堡壘・砲臺の配置については図9も参照。末尾の不明1～10については位置が特定できていない。

- 2) 「地名対照」は、ロストーフ編(1980:261-263)の「地名対照表」による。
- 3) 備考欄の「一覽図」は「旅順要塞攻撃作業一覽圖」を示す。

測図ニ従事ス」としている。他方横山は1877年の生まれで、1894年に大坂尋常中學校を中退して以後、機会をみつけて勉学に励み、1896年に工兵第三方面呉支署の雇いとなった。そのご1904年に陸軍省雇員となり、翌1905年2月6日～9月31日の間、やはり「旅順堡壘砲臺五百分一測図ニ従事」したとしている。執行については、同様の資料を発見できなかったが、1897年4月まで臨時台湾鉄道隊附の雇員をしていたことがわかる¹⁶⁾。本格的な測量教育を受けていた向井や柳谷、古参の松井の描いた図と、雇員であった秋山や横山、執行の描いた図に差は見られず、いずれも細密なできあがりになっているのは、臨時測図部で測量に従事するまえに、彼らが測量や製図の知識や技術を蓄積していたからと考えられる。ともあれ、旅順砲台群の測量は、旅順陥落後

まもない、秋山や横山の履歴書に記された期間におこなわれたことになる。

表1にもどろう。これに示した旅順要塞砲台図が、南山砲台群・旅順砲台群について作成された図を網羅しているかどうかという点については、疑問がのこる。上記「東鷄冠山北堡壘圖」についても、「附圖一葉」とするのに、これにあたるものを発見していない。そうした点から、この表はさらに今後発見される可能性のある資料によって充実する必要があるといえよう。

つぎに「五千分一旅順要塞近傍圖」の目録(表2)およびその一覽図(図9)の検討にうつろう。「五千分一旅順要塞近傍圖」の各図葉にみえる書誌的データは多いとはいえ、作製・発行機関(臨時測図部・陸地測量部、さらに図によっては参謀本部も記入)のほ

表 2 : 五千分一旅順要塞近傍圖の目録

	図名	測図	製版	発行
1	河南	1905年8月	1905年10月	
2	傳家庄	1905年8月	1905年10月	
3	龍頭	1905年8月	1905年10月	
4	郭家屯	1905年7月	1905年10月	
5	小孤山	1905年7月	1905年10月	
6	塩厰	1905年7月	1905年10月	
7	周家屯北部	1905年8月	1905年10月	
8	周家屯	1905年8月	1905年10月	
9	王家甸子	1905年8月	1906年1月	
10	團山子	1905年8月	1905年10月	
11	大孤山	1905年6月	1906年1月	
12	東鷄冠山	1905年7月	1905年10月	
13	白銀山	1905年6月	1905年10月	
14	南夾板嘴	1905年6月	1905年10月	
15	土城子北部	1905年8月	1905年10月	
16	土城子	1905年4月	1905年10月	
17	鳳凰山	1905年4月	1905年10月	
18	大頂山	1905年4月	1905年10月	
19	大八里庄	1905年4月	1905年10月	
20	二龍山	1905年4月	1905年10月	1906年3月13日
21	教場溝	1905年5月	1906年1月	
22	旅順口	1905年6月	1906年1月	
23	模珠礁	1905年6月	1905年10月	
24	石灰窯子	1905年8月	1906年1月	
25	左家屯	1905年4月	1905年10月	
26	夾子山	1905年4月	1905年10月	
27	火石嶺	1905年4月	1905年10月	
28	水師營	1905年4月	1905年10月	
29	松樹山	1905年4月	1905年10月	
30	三里橋子	1905年4月	1905年10月	
31	白玉山	1905年5月	1905年10月	
32	魚雷營	1905年6月	1905年10月	
33	饅頭山	1905年6月	1905年10月	
34	大潮口	1905年8月	1905年10月	
35	前沙包	1905年8月	1906年1月	
36	西泥河子	1905年4月	1905年10月	
37	大王莊	1905年4月	1905年10月	
38	碾盤溝	1905年5月	1905年10月	

39	徐家屯	1905年4月	1905年10月	
40	椅子山	1905年5月	1905年10月	
41	西太陽溝	1905年6月	1905年10月	
42	黑嘴子山	1905年7月	1905年10月	
43	城頭山	1905年6月	1906年2月	
44	白嵐子	1905年7月	1905年10月	
45	潮口	1905年7月	1906年1月	
46	八隻船	1905年8月	1906年1月	
47	王家屯	1905年8月	1905年10月	
48	李家溝	1905年8月	1905年10月	
49	冷家屯	1905年8月	1905年10月	
50	曲家屯	1905年5月	1905年10月	
51	高嶺山	1905年5月	1906年1月	
52	海鼠山	1905年5月	1906年1月	
53	爾靈山	1905年6月	1905年10月	
54	鴉鳴嘴	1905年6月	1905年10月	
55	盛家溝	1905年6月	1905年10月	
56	潘家溝	1905年7月	1905年10月	
57	大東尖	1905年7月	1906年2月	
58	老鐵山	1905年7月	1905年2月	
59	袁家溝	1905年9月	1906年1月	
60	尖頂山	1905年9月	1906年1月	
61	張家溝	1905年9月	1906年2月	
62	潘台	1905年5月	1905年10月	
63	雙鳴灣	1905年5月	1905年10月	
64	隋家屯	1905年5月	1905年10月	
65	大潘家屯	1905年6月	1906年1月	
66	高家屯	1905年6月	1905年10月	
67	大劉家屯	1905年6月	1906年1月	
68	金家屯	1905年7月	1906年2月	
69	將軍山	1905年8月	1906年2月	
70	大嶺溝	1905年7月	1906年2月	
71	老鐵山西部	1905年7月	1906年2月	
72	九頂山	1905年9月	1906年2月	
73	大艾子口	1905年9月	1906年2月	
74	山頭後屯	1905年9月	1906年2月	
75	塩灘	1905年9月	1905年10月	
76	大口井	1905年5月	1906年1月	
77	陳家溝			
78	高山			

79	羊頭窪			
80	羊頭山	1905年6月	1906年1月	
81	大楊家屯			
82	千家屯			
83	郭家套			
84	陳家泉			
85	九頂山西方			
86	大古山			
87	大甸子			
88	大甸子南部			
89	大口井西部			
90	不明			
91	不明			
92	不明			
93	不明			

かは、測図・製版時期（図によっては発行時期も記入）を示す程度である。表2にはこのうち後者を示しているが、これを記入していない図は、現物が地理・地図部がないものとなる。これらの図幅のタイトルや通し番号が、隣接する図に記入されたものによっていることはあらためていうまでもない。また、現物のない図幅の範囲は、図9にみえるように、西端の海岸部を描くもので、わずかにすぎない。

なお、表2に示した測図時期は、早いもので1905年4月、遅いもので同9月となっている。すでにみた秋山利一郎と横山正三の履歴書にあらわれる作業時期と重なっている。

ところで、「五千分一旅順要塞近傍圖」には、小さいながら旅順要塞砲台図に描かれた砲台や堡壘も描かれている。両者の図形が基本的に一致することはあらためていうまでもないが、「東鷄冠山北堡壘圖」や「椅子山堡壘圖第一」を「五千分一旅順要塞近傍圖」の二龍山図幅や椅子山図幅の該当箇所と比較してみると、前二者に描かれた方位線が西偏していることがあきらかである。これは、旅順要塞砲台図に示された方位線が地磁気（コンパス）方位によるためであろう。また、とくに「東鷄冠山北堡壘圖」では、日本軍の攻撃によって破壊された部分も克明に描くのにに対し、上記二龍山図幅の該当箇所は、破壊の状

況を示していない。これは、旅順要塞砲台図と「五千分一旅順要塞近傍圖」では作図方針がちがっていたことを示唆する。

こうしたちがいは、『明治三十七八年日露戦史』第六卷附図第十「旅順要塞主要堡壘及砲臺」（参謀本部1914）とのあいだにもみとめられる。「旅順要塞主要堡壘及砲臺」に示された「東鷄冠山北堡壘圖」（千分の1）でも、日本軍による破壊は記入せず、もとの形を描いている。また類似の場所の断面図も示すが、その位置がずれている点にも留意される。これについては、別の復元的な実測図をあらためて作製した可能性も考えられる。

さらに「五千分一旅順要塞近傍圖」の二龍山図幅と『明治三十七八年日露戦史』第六卷附図第九「東鷄冠山附近攻防工事」（3千分の1）を比較してみると、砲台や堡壘の名称だけでなく（「吉永堡壘」と「東鷄冠山第二堡壘」のほか「M砲臺」と「東鷄冠山第四砲臺」）、道路の描き方や鉄条網の設置場所などにも差がみとめられ、重要戦跡については、あらためて測量がおこなわれた可能性もうかがわれる。このような点からすれば、『明治三十七八年日露戦史』の編集の経過や組織についてもさらに検討の必要があるといえよう。

85 欠 九頂山西方	72 九頂山	59 袁家溝	46 八隻船					
86 欠 大古山	73 大艾子口	60 尖頂山	47 王家屯	34 大潮口	24 石灰窯子	15 土城子北部		
87 欠 大甸子	74 山頭後屯	61 張家溝	48 李家溝	35 前沙包	25 左家屯	16 土城子	7 周家屯北部	
88 欠 大甸子南部	75 塩灘	62 潘台	49 冷家屯	36 西泥河子	26 夾子山	17 鳳凰山	8 周家屯	1 河南
89 欠 大口井西部	76 大口井	63 双嶋灣	50 曲家屯	37 大王莊	27 火石嶺	18 大頂山	9 王家甸子	2 傅家庄
90 不明	77 欠 陳家溝	64 隋家屯	51 高崎山	38 碾盤溝	28 水師營	19 大八里庄	10 團山子	3 龍頭
91 不明	78 欠 高山	65 大潘家屯	52 海鼠山	39 徐家屯	29 松樹山	20 二龍山	11 大孤山	4 郭家屯
92 不明	79 欠 羊頭窪	66 高家屯	53 爾靈山	40 椅子山	30 三里橋子	21 教場溝	12 東鷄冠山	5 小孤山
	80 羊頭山	67 大劉家屯	54 鴉鴨嘴	41 西太陽溝	31 白玉山	22 旅順口	13 白銀山	6 塩廠
93 不明	81 欠 大楊家屯	68 金家屯	55 盛家溝	42 黒嘴子山	32 魚雷營	23 模珠礁	14 南夾板嘴	
	82 欠 干家屯	69 將軍山	56 潘家溝	43 城頭山	33 饅頭山			
	83 欠 郭家套	70 大嶺溝	57 大東尖	44 白嵐子				
	84 欠 陳家泉	71 老鐵山西部	58 老鐵山	45 潮口				

図9：「五千分一旅順要塞近傍圖」一覽図

明治38年4～9月測図、明治38年10月～39年2月製版（ただし、すべてを確認したわけではない）

以上、アメリカ議会図書館の地理・地図部が収蔵する旅順要塞砲台図と「五千分一旅順要塞近傍圖」について概要を示すとともに、その作製の経過、『明治三十七八年日露戦史』にみられる地図との関係を示した。これからすれば、2010年9月の調査は、目録作成にむけた応急的なものにすぎず、写真撮影を主体とした本格的調査がさらに必要なことが明らかである。またこれらの図がアメリカ議会図書館に収蔵された過程についてもほとんどふれることができなかった。「五千分一旅順要塞近傍圖」の各葉の裏

面には、ARMY MAP SERVICE LIBRARY のゴム印が、OMAHA および CAPTURED MAP のゴム印とともにみられ、その来歴を探る手がかりを示しているが、その意味についても今後の課題である。

なお、本報告を作製するにあたってアメリカ議会図書館（The Library of Congress）地理・地図部（Geography and Map Division）の皆さん、とくに Cataloging Team Leader の Min Zhang 氏、さらに Asian and Middle Eastern Division の藤代真苗氏にはいろいろなお配慮をいた

だいた。また US History Specialist の Steve Davenport 氏、日本人スタッフの菅井則子氏、地理・地図部の Senior Cartographic Librarian の John W. Hessler 氏、さらに伊東英一氏を初めとする Asian Reading Room の皆さんには、海外の図書館が初めての学生メンバーに対して、終始適切な案内をいただいた。くわえて、これまで小林が調査をともししてきた山近久美子氏（防衛大）、渡辺理絵氏（山形大）には、資料の利用を許していただいた。以上の方々に記して感謝いたします。

注

- 1) ほかに鈴木涼子（東京大大学院）および波江彰彦（現大阪大）の助力をえた。
- 2) この「横断的研究視察」には、ほかに藤澤聖也（大学院博士後期課程）も参加したが、アメリカ公文書館（カレッジ・パーク）での作業に没頭しており、旅順要塞砲台図の調査には参加できなかった。
- 3) アジア歴史資料センター資料「9月21日陸軍大臣へ、陸地測量手和田義三郎、西田辰三大本営付被命度、移牒」明治37年9月12日、21日、Ref. C09122036900。和田は回想のなかで6月に大本営付となったと述べているが、アジア歴史資料センター資料にしたがう。
- 4) アジア歴史資料センター資料「中野測量手等南山模型製作の旨派遣通知の件、第2軍参謀長」明治37年6月10日、Ref. C06040650300。
- 5) 口絵写真の説明では「東鷄冠山北砲臺」としているが、座談会の本文の和田の発言（52頁）では「東鷄冠山北堡壘」となっている。「東鷄冠山北砲臺」は、旅順要塞砲台図だけでなく「旅順要塞攻撃作業一覽圖」にもなく、誤記と考えられる。また和田の発言のあと、松井正雄（中佐）が、コンドラチェンコ少将の死亡した場所は、別にあることを指摘しており、この口絵写真のタイトルには、注意を要する。
- 6) アジア歴史資料センター資料「参謀本部外邦図中機へ秘の程度改正の件」明治39年6月15日、Ref. C06040650300。この資料の、「依然軍事機密トス」とする地図の冒頭に、「五千分一南山近傍圖」と「五千分一旅順要塞近傍圖」があらわれる。
- 7) アジア歴史資料センター資料「9.6 第3軍参謀長、金州半島測図要員の件」明治37年9月6日、Ref. C06040478900。
- 8) アジア歴史資料センター資料「38.1.14 発長岡次長宛 伊地知少将、測図班等の配属に関する件」明治38年1月14日、Ref. C06040291100。
- 9) アジア歴史資料センター資料「3月25日、19号、臨時測量部長より陸軍省雇員三樹齋一以下21名陸地測量手任用方の件」明治40年3月21日（Ref. C07082509400）に収録された井上泰一と太田銃太郎（いずれも日露戦争当時は陸軍省雇員の測図手）の履歴書から、彼らは1904年10月4日～12月5日に「南山五千分一碎部測圖」に従事したとしている。また翌1905年1月下旬以降9月下旬までは、旅順での測量に従事したと記している。ただしその内容について井上は「五千分一碎部測圖」とするが太田は「一万分一碎部測圖」とする。
- 10) アジア歴史資料センター資料「臨時測図部編成要領」明治37年5月11日、Ref. C06040149800。
- 11) アジア歴史資料センター資料「8.29 陸軍大臣、臨時測図部地形測量班編成の件御裁可」明治37年8月29日、Ref. C06040458300。
- 12) アジア歴史資料センター資料「本部より各所へ案」明治38年2月28日、Ref. C07082398100。
- 13) アジア歴史資料センター資料「38.8.5 臨時測図部長 測図班1個分班樺太へ向はしめたり」明治38年8月5日、Ref. C06040390600。
- 14) アジア歴史資料センター資料「右の者雇入仕込し試験の上用立の件」明治14年8月24日、Ref. C07080377000、同「陸軍参謀本部日報、陸軍総務局(1)」Ref. C09060084700、同「佐多工兵鑑護以下29名昇給の件」明治21年7月20日、Ref. 06080693700。
- 15) アジア歴史資料センター資料「3月25日、19号、臨時測量部長より陸軍省雇員三樹齋一以下21名陸地測量手任用方の件」明治40年3月21日、Ref. C07082509400。
- 16) アジア歴史資料センター資料「陸軍省雇員を被免民政局へ引継の者申進及別紙」明治30年4月14日、Ref. C10061160900。

文献

大江志乃夫 1980. 「(解説) I.I. ロストーノフ編『日露戦争史』について」ロストーノフ、I. I. 著、大江志乃夫監修、及川朝雄訳『ソ連から見た日露戦争』原書房、付録1-5頁。

- 岸田健司 2010. 「安奉線改築問題と日本陸軍」 軍事史学 46(3): 88-106.
- コナフトン、R. M. 1989. 『ロシアはなぜ敗れたか：日露戦争における戦略・戦術の分析』 新人物往来社.
- 小林 茂・渡辺理絵・山近久美子 2010. 「初期外邦測量の展開と日清戦争」 史林（史学研究会）93(4): 473-505.
- 参謀本部編 1904-1907. 『明治二十七八年日清戦史』 附図、東京印刷.
- 参謀本部編 1912. 『明治三十七八年日露戦史、第一卷附圖』 東京偕行社.
- 参謀本部編 1914. 『明治三十七八年日露戦史、第六卷附圖』 東京偕行社.
- ステパーノフ著、袋一平・正訳 1972. 『旅順口』 上巻、新時代社
- 《中国軍事史》 編写組 1991. 『中国軍事史、第 6 卷、兵壘』 北京：解放出版社.
- 日本測量協会編 1952. 『陸地測量部修技所・同教育部・地理調査所技術員養成所 卒業者名簿（昭和 27 年版）』 日本測量協会.
- 野坂喜代松・和田義三郎・平木安之助・高木菊三郎・松井正雄 1944. 「明治三七八年戦役と測量（座談会）」 研究蒐録地圖（陸地測量部）、昭和 19 年 3 月号、41-54 頁（リプリントを小林茂・渡辺理絵解説 2011. 『研究蒐録地図』 不二出版に収録）.
- 山田朗 2009. 『世界史のなかの日露戦争（戦争の日本史 20）』 吉川弘文館.
- ロストローフ、I. I. 編、大江志乃夫監修、及川朝雄訳 1980. 『ソ連から見た日露戦争』 原書房.
- 和田義三郎 1944. 「明治三十七八年戦役に於ける大本營寫景班の活動」 研究蒐録地圖（陸地測量部）、昭和 19 年 4 月号、54-58 頁（リプリントを小林茂・渡辺理絵解説 2011. 『研究蒐録地図』 不二出版に収録）.
- 渡辺理絵・山近久美子・小林茂 2009. 「一八八〇年代の日本軍将校による朝鮮半島の地図作製—アメリカ議会図書館所蔵図の検討」 地図（日本国際地図学会）47(4): 1-16.
- Powell, R.L. 1955. *The Rise of Chinese Military Power 1895-1912*. Princeton: Princeton University Press.
- Yamachika, K., Watanabe, R. and Kobayashi, S. 2010. The route maps of the Korean Peninsula drawn by Japanese army officers during 1880s. Kinda, A. et al (eds.) *Proceedings of the 14th International Conference of Historical Geographers*. Kyoto University Press, 307-308.

<付記> 本稿脱稿後、A. von Schwartz 1908. *Influence of the Experience of the Siege of Port Arthur upon the Construction of Modern Fortresses*. Washington: Government Printing Office. (ロシア語からの翻訳) を見ることができた（ただしリプリント）。今後はこの書物の地名対照表（7～8 頁）および付図により、さらに検討をふかめたい。